

町長

ひとりごと

91

斉藤

讓



日本人初の女性宇宙飛行士向井千秋さんが、十五日間におよぶ宇宙飛行を終えて無事帰還した。今回の飛行では、宇宙メ

ダカの誕生実験も行われ、スペースシャトル「コロンビア」の船内で向井さんの働く様子や、出身地の小学生との会話交信などが、リアルタイムでテレビ放映され、茶の間の話題を独占した。また、この同じ時期に千年に一度の確率といわれるSL9と名づけられた彗星が木星に衝突するという、まさに偶然ともいえる宇宙の壮大なドラマも重なって、今年の夏はさながら宇宙ショーで幕を開けた感がある。それにしても宇宙科学の進歩には、唯々驚くばかりである。しかし、反面ではいつもなら夏の夜空に深遠な宇宙の神秘を思い、悠々の時の流れを感じて、人間という動物の存在の余りの小ささに沈黙し、七夕にさややかな願いをかけるロマンチックな夢が、呆気なく破られたような気がして、一抹のさびしさを禁じ得ない。いま銀河をはさんで牽牛星と織女星が、苦笑しながら下界を見下していることであろう。

▼帰還後の記者会見では、ドクター・チアキに質問が集中したと新聞は伝えている。宇宙の旅はとて楽しく、世界最長の滞在記録を残せたのはラッキーの一語。その旅を終えて無事地球に帰還できて、今日が生涯最高の日です。」

と第一声を語り、無重力の世界と降り立った地球の違いはどうかという質問に、「両肩と頭をだれかに押え

つけられてる感じ。一枚の紙の重さもはつきりわかります。」と答える。また、念願の「丸ごと地球を見たかった」という地球の印象について

「きれいで荘厳にも見た。暗黒の宇宙に浮ぶ地球を見て、ここに生まれたことを誇りにさえ感じました。」

天候待ちの最後の一日は、カバナ船長らと操縦席から思うさま地球を観察したという。

「夜の東京から大阪・四国までが一瞥でき、とくに

東京の夜景は美しかった。その日本を離れてすぐ太陽が出ました。日本が本当に日いずる国なんだなと感激しました。」

「日いずる国」などという古い言葉が、まさか宇宙の旅から帰った彼女の口から出ようとは、思いもかけなかった。思わず中学生の頃、日本史で学んだ「日いずる国の天子より日の没する国

日いずる国



昨年、長雨と冷夏が嘘のように思えるほど、極端な対象である。水利の無い農作物は萎え、枯死するものさえ出はじめている。更に深刻なのは、各地の水がめであるダムが干上りはじめ、生活に大きな影響がでていることだ。特に、四国地方では、一日五時間給水という厳しい事態に追い込まれている。ビルの冷房を止め、会議を中止し、学校のプールは勿論のこと便所の利用まで制限せざるを得なくなっているようだ。「水はある、電気はある、何々もある。」という前提で構築されている近代都市の脆弱な一面を曝け出したといっても言い過ぎではあるまい。自然は、決して人間の都合に合わせて調和したり存在したりはしない。もしも、こんな状態の中で大地震でも発生したら、どんなことになるのであらうか。考えただけでも空恐ろしくなる。私達人間のあくなき利便さの追求は、自然から見れば、それは慢心と映るかもしれない。たかが水、されど水。水こそ生命の源であることを、

いま私達は改めて思い知らされている。山野の樹木の無謀な伐採は、水源の涵養を断ち切ることになる。緑の後退は、人類破滅の序曲だと私は虞れる。

▼「苦しい時の神だのみ」という言葉もあるが、瀬戸内海に浮ぶ因島では、島の観光協会長である市長も参加して、「雨乞い」の神事が行われたとテレビは報じていた。今どき神だのみかなどと輕蔑することなかれ。所詮、科学万能主義は錯覚でしかない。私は思っている。人々はそれを極めれば極めるほどその限界と脆さを悟ることであらう。そして、究極は創造主に跪き、祈るほか術のないことを知るはずだ。

台風七号は、迷走に迷走を重ねた揚句、水を渴望する四国・瀬戸内地方を縦断し、わずかであったが恵みの雨を置いていった。雨乞いが、天に通じたのではあるまいか。